

特別寄稿

令和元年度看護教育研究学会研修会

看護学実習指導の神髄 — 経験学習モデルによる分析から実習指導の本質を探る —

The Essence of Nursing Practicum Instruction: Exploring the Essence of Practicum Instruction by Using an Experiential Learning Model

佐藤みつ子¹⁾

Mitsuko Sato

キーワード：看護学実習指導、経験学習モデル、看護教育

Key words : Nursing Practicum Instruction, Experiential Learning Model, Nursing Education

要旨

看護教育研究学会は、看護教育並びに看護の質の向上を図ることを目的にしている。学会活動として、平成 12 年から継続して研修会を実施している。令和元年度の研修は、実習指導場面を「経験学習モデル」を用いて分析し、学生の経験を活かした実習指導のあり方を検討し、実習指導の本質について討議することをねらいとした。研修では、看護学実習を取り巻く背景や臨地実習指導者に求められる役割、看護学生の特徴、代表的な学習モデル、経験から学ぶとは、経験学習モデルとは、経験学習モデルを用いた事例の展開について講義し、その後、課題事例を用いてグループワークを実施した。研修会を通して、「具体的な学生の体験から何を学ばせればよいか明らかになった」「目の前のことだけにとらわれず、概念化を意識して指導にあたりたい」等、感想が聞かれ、看護学実習は、学生にとって重要な機会となることから指導力を磨く必要性が確認された。

I. はじめに

実習指導に携わっている看護教員は、講義で学んだ知識や技術を個別看護の展開に応用する方法、看護技術の原理・原則を対象者の健康状態に応じて援助する方法、患者との人間関係を形成するプロセス、望ましい看護師の態度等、実習の指導内容や方法について、常に、検討を重ねているのではないと思われる。また学生の場合、自分の行っている看護行為に集中してしまい患者にとって良かったのか、実践した看護が患者にどのような影響を与えているのか、援助の意味に気づかない

学生をどのように指導したらよいのか戸惑いがあったり、あるいは実習目標を達成するだけでは「何か物足りない」と感じる体験をしているのではないと思われる。

近年、病院実習の場合、入院患者の在院期間の短縮化、患者の安全確保、患者の人権尊重のため、直接患者と接する機会が減少している（厚生労働省、2003；2007；2011）。このように、学生の実習環境が変化していることから、筆者は、臨地実習における看護場面を分析し、実習目標の到達にとどまらず学びを応用できるよう具体的な体験を抽

1) 了徳寺大学健康科学部看護学科 Ryotokuji University

象化のプロセスを通して、人間観、健康観、社会観(環境観)に気づかせることが看護の本質を考えさせる上で重要であると考えている。看護基礎教育における実習指導に関する先行研究は、実習指導者の役割、効果的な実習指導方法、実習指導者の在り方等について報告されている(二十軒、2017; 奥津・片山・大矢・赤澤・荒川、2002; 高木、2001)。また安酸・北川(2018)は、看護を教える人のための「経験型実習教育」について著している。しかし「経験学習モデル」を用いた臨地実習指導のあり方についての研究報告は少ない。

本年度の研修会では、実習指導の本来について考え、学生にとって効果的な体験にするための方策について考える機会とした。

Ⅱ. 令和元年度研修会の概要

1. 研修のねらい

研修のねらいは、実習指導場面を「経験学習モデル」を用いて分析し、実習指導の本質とは何か、学生の経験を活かした実習指導のあり方を検討することとした。

2. 研修の参加者

参加者の年齢は、50～59 歳 50.0%が最も多く、次いで 40～49 歳 17.9%、30～39 歳 10.7%であり、看護教員が 64.3%、看護師 14.3%で、実習指導経験している者も多かった。研修テーマについては「非常に良かった」と「良かった」を合わせて 96.5%、研修目的・目標の達成度も 96.4%であった。

3. 研修プログラムと研修内容

研修は、講義を実施した後、課題事例に基づきグループワーク、討議、発表・まとめのプログラムで実施した。講演内容は、表 1 に示すとおりで、以下、講義概要について述べる。

1) 看護学実習を取り巻く背景

看護学実習を取りまく背景については、人口構造の劇的変化(少子高齢、多死化、総人口数の減少)や疾病構造の変化(生活習慣病や老化に伴う

表 1 講演内容

-
- ・看護学実習を取りまく背景
 - ・看護基礎教育課程における臨地実習
 - ・臨地実習の目標と看護概念の関係
 - ・臨地実習指導者に求められる役割
 - ・看護学生の特徴
 - ・代表的な学習モデル
 - ・看護基礎教育課程における臨地実習の変遷
 - ・経験学習モデルの概説
 - ・経験学習モデルを用いた事例
 - ・学生が経験を生かせるための実習指導のあり方
 - ・経験学習モデルを用いた事例展開とグループワーク
 - ・全体討議とまとめ
-

疾患の増加)、治す医療から治し支える医療・病院完結型から地域完結型へ変化し地域包括ケアシステムの実現が推進されている。さまざまな社会の変化は、看護基礎教育における臨地実習にも影響を与えている。

2) 看護基礎教育における臨地実習

筆者は、臨地実習の意義について、①既習した知識・技術・態度を統合し体験することによって知識・技術・態度への理解が深まる、②看護の原則の応用する必要性に気づき個別看護が修得できる、③自己の知識不足・技術の未熟さに気づくことができる、④実践した看護に対する対象者の反応から看護の喜びや充実感、満足感、責任感をもつことができる、⑤職業意識が芽生え看護専門職業人としての自覚が強化される、⑥多くの看護現象と直面する体験から人間観、健康観、社会観、看護観を形成できる、⑦人間的成長の場となると考えている(佐藤、1998)。

3) 臨地実習目標と看護概念との関係

臨地実習目標(例)は、各看護学実習の到達をめざすものであるが、看護学実習においての最終目標は、学生に看護の本質を考え、修得させることではないかと考える。例えば、図 1 に示したよ

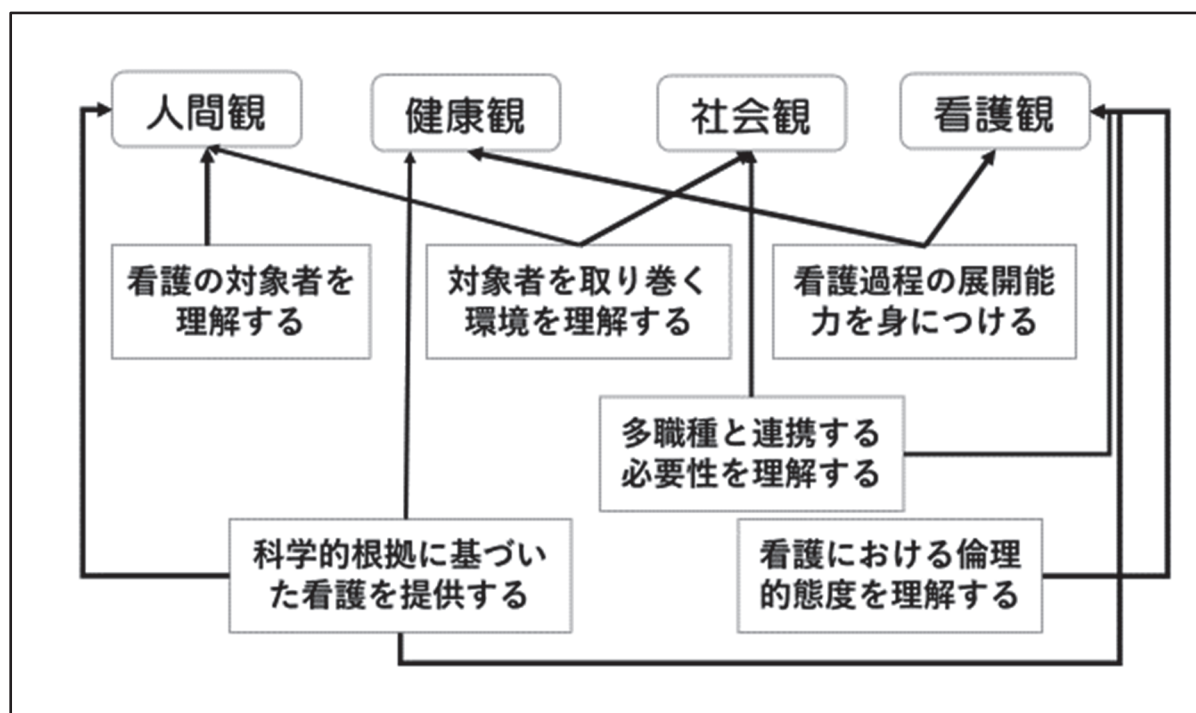


図1 臨地実習目標と看護の概念との関係

うに、実習目標と看護概念はつながっている。「」は目標をあらわし、『』はそれぞれの看護の概念をあらわす。「看護の対象者を理解する」および「対象者を取り巻く環境を理解する」は、『人間観』、『社会観』を形成するのにつながり、「看護過程の展開能力を身につける」は、『健康観』、『看護観』につながる。また「科学的根拠に基づいた看護を提供する」は『人間観』、『健康観』、『看護観』、「多職種と連携する必要性を理解する」は、『看護観』、『社会観』、「看護における倫理的態度を理解する」は、『看護観』につながると考える（佐藤、1996）。

4) 臨地実習指導者に求められる役割

臨地実習指導者に求められる主な役割は、①スタッフや教員との調整役として、学校の教育方針（理念・目的・目標）、実習目的・目標を理解し、実習病棟全体で指導に関われるように実習環境・指導体制を整える。また受け持ち患者を選定する。②患者の安全・安楽の視点を持ち個別的・具体的な看護を支援する。③受け持ち患者の看護計画の立案や看護実践について助言、指導することである。

看護教員の役割は、①実習内容を十分に把握し、

実習目的、目標を設定する、②学生の学習状況を把握し、看護の本質を理解できるように具体と抽象をつなげる、③受け持ち患者に説明して同意を得る、ことである

5) 看護学生の特徴

学生に合った指導するためには、看護学生の理解が必要である。今回の研修会で参加者に「あなたは、今の看護学生の特徴をどのように捉えていますか」との質問をしたところ、「コミュニケーション能力が低下している」、「ストレス耐性が低い」、「自発的な行動よりも指示待ちが多い」、「競争意識や達成意識が低い」、「プライベートを重視する」、「合理的・効率的な思考傾向が強い」、「読解力等、基礎学力が低下している」、「想像力・予測力の不足」、「自分の意見を言えない」、「言い訳をする」、「受け身で聞いている学生が多い」、「すぐに回答を求める」、「安易に様々な情報を使っている」、「情報の取捨選択がうまくできていない」等と捉えていた。しかし、学生の状況を画一的にとらえるのではなく指導する学生一人一人の特徴をとらえ指導に役立つことが大切である。

6) 代表的な学習モデル

「経験学習モデル」を含め他の代表的な学習モデルを 4 つ概説した。①「経験学習モデル」は、知識を受動的に覚えるではなく、自らの経験から独自の知見を紡ぎ出すことである。②「学習転移モデル」は、講義や演習で修得した知識・スキルを実務現場に転移することである。③「批判的学習モデル」は、自分の置かれた状況が無批判に当たり前とする姿勢を問題視し、自分の行動や考え方について望ましい姿を問い、現状に対する問題意識を育むことである。④「正統的周辺参加モデル」は、学習は仕事の中の日常行為に埋め込まれており、学習者は学習と仕事を分離して意識している訳ではないとする考え方である。最初は熟達している人の仕事を見よう見まねで覚えていくが、徐々に「周辺の」な位置から「中心的」な役割を果たすようになっていくことを学習と捉え、徐々に正規メンバー（＝正統的）となるとする考えである。

7) 教育課程における臨地実習の変遷

看護基礎教育課程において臨地実習の位置づけも変遷してきている戦後初めて規定された昭和 26 年カリキュラムは、医学の学問体系にもとづく科目構成のため診療科目別に看護（内科疾患と看護、外科疾患と看護等）を学習し、診療科別に病棟実習（82 週）および外来実習（20 週）を経験している。特徴としては、疾患を持った人（病人）の看護が中心で、実習は看護師の業務を実施しながら学習するという教育で応用のきかない繰り返し学習であった。

昭和 42 年のカリキュラムは、専門科目として看護学が独立し臨床実習を各学科目の授業に組み込み専門分野の授業が増加した。看護学は診療科別の体系ではなく人間の成長発達を軸にした教育課程となった。臨地実習では、学内で知識や技術を修得した上で、看護理論に裏付けられた看護実践能力、応用能力を育成することを目指した。平成元年のカリキュラムでは、ゆとりある教育をめざすことをねらって総時間数の減少に伴い臨地

実習が 1035 時間に減じられた。思考力や問題解決能力を育成すること、多職種との連携を図りながらチーム医療の理解が強調された。

平成 8 年のカリキュラムでは、病院実習のみでなく、直接、患者や家族に接する実習を推進するため在宅看護実習、また疾病構造の変化から精神看護学が設けられた（厚生労働省、2007）。

平成 21 年のカリキュラム改正では、高齢化・少子化の進展、医療の高度化・専門化に伴い、統合分野が創設され統合実習（2 単位）が加わり看護学実習が 23 単位となった。自ら考え振り返り、自分で応用し、概念化の必要性が示された。

8) 経験学習モデルの概説

(1) 体験と経験の違い

大辞林では、「体験」と「経験」はどちらも実際に何かを見聞きしたり挑戦したり、何かにぶつかったりすることを意味するとなっている。体験は、実際に自分の身をもって経験することであり、経験は自分で実際に見たり聞いたり、行動してみたりして知識や技術など身につける意味である。

(2) 経験から学べる人・学べない人

経験から学べる人と学べない人の違いについて考える。松尾（2011）は、人は、経験さえすれば誰でも成長できるものではない、また体験したことを振り返り、概念化し、さらに経験することによって体験の価値が大幅にあがると述べている。つまり、体験の積み重ねなくして経験知は蓄積できない。成長するには、経験学習のプロセスを身につけることが欠かせない。良質な経験とは、経験を振り返り、成功・失敗の要因を理解することであると述べている。

(3) 体験から経験知へ

従来の学習は、知識付与型で自ら考えることなく身体を使ってトレーニングを繰り返す「体験」を重視するものであった。一方、現代は、自らの身体を使い、他者の意見を聞くことや自分の意見を述べることを通して知識、技術を修得する「経験知」を重視する学習に変化している。また変化のスピードが加速化し、不確実である社会、人々

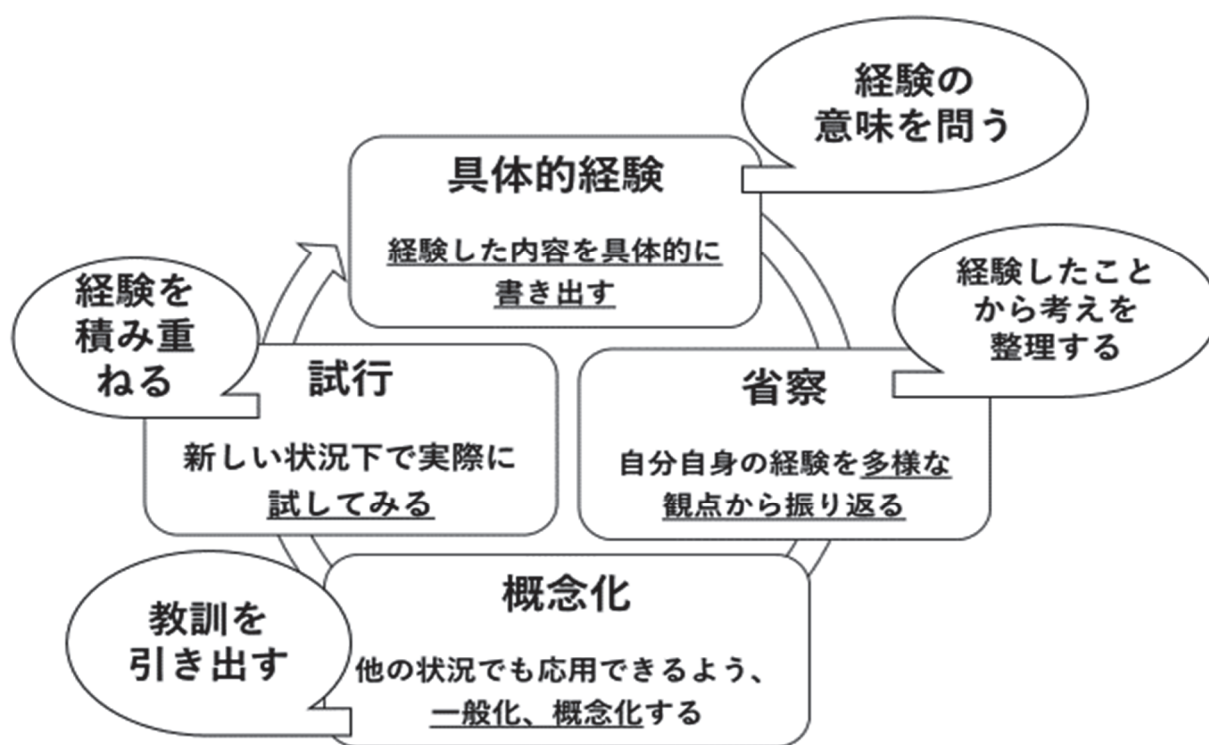


図2 経験学習モデル

の価値観も多様化している中、「体験」を「経験知」へと学びを変える「経験学習」の必要性が生じている。また人は、何から学び成長するのか、それは「経験から学ぶ」70%、「他者(上司・先輩)からのアドバイス」20%、「研修や書籍から学ぶ」10%(7:2:1の法則)と言われ、直接、経験することが成長につながると指摘されている(松尾、2011)。

(4) 経験学習モデルとは

経験学習モデルは、人は経験をし、省察することで深く学べるという考え方であり、従来の知識付与型学習やトレーニングと区別し、経験から学びを獲得していくプロセスをモデル化したもので、本研修でKolb・Peterson(2018)の考え方を紹介した(図2)。経験学習モデルは4段階で構成されている。①具体的な経験(具体的経験)、②振り返る(省察)、③抽象的概念化する(概念化)、④次の経験に活かす(試行)の4段階のサイクルを通して、経験が知識に変換されるプロセスである。

「具体的経験」は、自分の体験、記憶としっかり向き合っ見て見たこと、気づいたこと、感じたこと、考えたことを自分のことばで言語化することであ

る。いつどこでどのような経験をしたか、どのような結果を得たか、実践でその後に役立つエピソード的经验(成功・失敗)を抽出する。

「省察」は、経験を多様な視点から振り返り、新しい発見や意味を見出すことである。良かったこと、悪かったこと、改善が必要だと思うこと、その原因や理由を探る(印象に残っている経験や感じたこと、気持ち、経験を通して考えたこと、分かったこと、それぞれの経験の意味を考える)ことである。

「概念化」は、他の状況でも応用できるよう一般化、概念化(ポイントをまとめる、方程式・定理化する、重要な教訓は何か、マニュアル化する、他の場面でも応用できる)することである。

「試行」は、新しい状況下で自らの持論を実際に試してみる(検証する)ことである。

9) 経験学習モデルを用いた事例

成人看護学実習(急性期・周手術期)の事例(森・佐藤・宇佐美、1992)を紹介し、経験学習モデルを用いて分析し、実習指導の神髄(本質)を考えた。実習目標と概念化の関係を図3に示した。

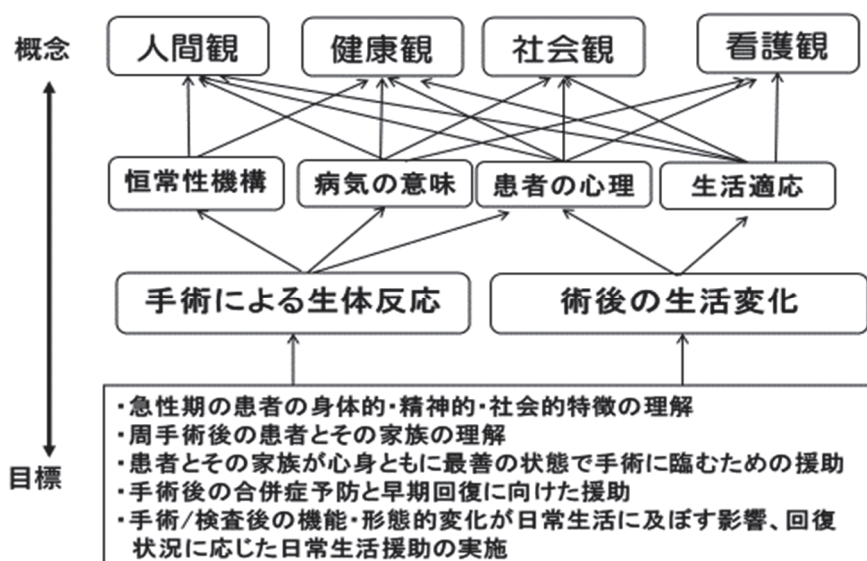


図3 実習目標の概念化

(1) 成人看護学実習の目的 (例)

急性期・周手術期にある成人期の患者および家族を包括的にとらえ健康状態の変化に即した適切な看護を実践する能力を養う。

(2) 成人看護学実習の目標 (例)

- ①急性期にある患者の身体的・精神的・社会的な特徴が理解できる
- ②急性期・周手術期にある患者とその家族を理解することができる
- ③患者とその家族が心身ともに最善の状態です手術に臨むための援助が実施できる
- ④手術後の合併症予防と早期回復にむけた援助を実施することができる
- ⑤手術・検査後の機能・形態的变化が日常生活に及ぼす影響を理解し、回復状況に応じた日常生活援助が実施できる

⑥退院後の生活を予測して、残存機能を最大限に活用した自立への援助と家族を含めた生活指導について理解できる

⑦医療チームの一員としての看護者の役割と他職種との連携のあり方を考え、看護学生として責任ある行動をとることができる

(3) 事例

①対象学生：胃全摘術を受ける患者を受け持った2年次学生

②事例紹介：Xさんは80歳男性で3人の子どもはそれぞれ独立して生計を立てており、妻と二人暮らしである。食欲低下、体重減少がみられ、心配した妻からの勧めで受診したところ進行性の胃がんの診断を受け、胃全摘術を受けた

③学生の具体的な経験：術後1日目バイタルサイン測定の時、血圧の測定値が聞こえず3回測定する

Xさんが「腕がしびれる」「痛い」と言った。Xさんに測定値を聞かれたので、下が60、上が110と答えた。また、患者から「大丈夫か」と聞かれたので「大丈夫です。心配ないです」と答えた。

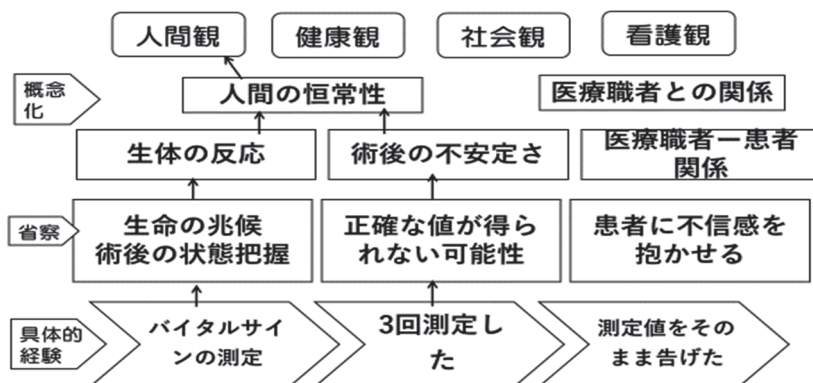


図4 省察・概念化を促す

(4) 省察から概念化

図4は、「具体的な経験」を「省察」し「概念化」のプロセスを示したものである。指導者が学生を省察させ概念化させる指導について紹介する。まず、学生にバイタルサイン測定について具体的に記述するように促す。バイタルサイン測定は、患者の「生命の兆候」、「術後の状態」、「生体の反応」を把握することであり、それを一般化、概念化すると「人間の恒常性」をあらわし、それをさらに抽象化すると人間の身体的特徴のひとつとしての人間の見方、考え方の『人間観』の理解につながる。また3回測定した行為は、「正確な値が得られない可能性」があり、それは「術後の不安定さ」を示し、概念化では「人間の恒常性」、「人間観」につながる。このように、学生の具体的な経験を抽象化、概念化できるよう指導することが、実習指導の神髄、本質につながるのではないかと考える。

Ⅲ. グループワークの概要

グループワークは、経験学習モデルを用いて、提示した4つの事例を分析し、実習指導の神髄、本質を考えることをねらいとした。グループワークは、経験学習モデルを用いて事例について、討議しまとめ、発表した。

Ⅳ. まとめ

1. 実習指導の本質と体験の意味づけ

臨地実習をとりまく環境の変化から実際に体験する機会が減少している状況においては、学生の体験をより教育的、効果的に活用できる指導力が必要である。実習は、「看護」を実感できる、自己の「看護力」を確認できる貴重な体験の場である。学生は、援助に集中してしまい技術の未熟さ等、見えるものには敏感に反応するが、気づきや感じたこと等、援助に必要な大切なことに気づかないことがある。このような学生には、「意味のある体験」をしているのだということを具体的に伝えることが、学生に自信を持たせるためにも重要なことであると考えられる。

2. 「経験学習サイクル」を用いることの教育的意義

河野(2015)は、学生の具体的な実習体験を意味のある体験であると気づかせ、経験したことを学習に変える方法について述べている。今回は、Kolb・Peterson(2018)の経験学習モデルを用いたところ、受講者からは、「概念化をしてみるとそれぞれが交差して人間観、健康観、社会観、看護観が繋がっていることがわかった」、「このグループワークで一番悩んだのが概念化であり、どう表現するか悩んだ。しかし、まとめてみると、高齢者の発達課題と生きがい、役割、慢性疾患患者へのかかわり等が概念化ではないかと考えた。また、概念化してみると、全てが看護のパラダイムにつながるということが分かった」、「概念化では、健康への不安、退院生活への適応、慢性疾患を抱えて生きる、社会生活を送りながら生きていくことを抽出した」、「省察として、病気が家族に与える影響、疾患の受容過程を考えてもらいたい、概念化では、家族機能を取り戻す、家族を支える看護の役割などを抽出した。看護のメタパラダイムに対しては、それぞれに結び付いていくのではないかと考えた」、「概念化として、役割、危機、価値、信念、コミュニケーション、対人関係、解剖生理、人間の理解に繋がると考えた」、「具体的に学生の体験から何を学ばせれば良いのか迷っていたが研修の学びで明らかになった。今後に活かしたい」、「カンファレンスでどのようなアドバイスをして方向づけたらよいか戸惑いを感じていた」、「日々、指導に追われ感情に流され大切な指導ポイントを押さえきれないこともあった」等、の感想が聞かれた。日頃の実習指導で戸惑いや指導の方向性がみえない指導者への示唆をあたえることができたと考えられる。また、「目の前のことだけにとらわれず、指導の柱を意識して何を考えさせたいか、概念化を意識して指導をしたい」、「意識してカンファレンスの中に取り入れながら学んでほしいことを教えていきたい」、「臨地実習において、どのようなことを学生に学ばせたいのか具体化することや考え方を改めて学ぶことができた」、「学生にとって次につな

がる実習になっていく」、「学生へ看護の楽しさを具体的に伝えていく方法として活用していきたいと思う」等、実習指導で大切にすべきことや指導の方向性につかめ今後の実習指導に活かしていきたい等、参加者にとって、実習指導者としてのあり方を考える一助となっていたと考える。

研修全体を通して、「他の学校や臨床指導者の様々な人の意見、考え方を知り、思考が深まり、情報も収集できた」、「実習指導に役立つ内容で大変有意義な時間となった」、「普段、行っている実習指導を明確に表現することで、学生の思考やどのような指導が必要なのかを明らかにできた」、「今回の研修を今後に活かし、質の高い教育ができるよう努力していきたい」、「概念化を導くためには、指導場面を再構成できる教員の力が必要である」等、視野の広がりや教材化できる教育力の必要性、今後に生かしたい等、研修が有意義な機会となっていた。これらの意見や感想から、ペーパーシミュレーションではあるが、具体的な経験を省察させる方法や概念化するプロセスについての学びがあったと思われ、「経験学習モデル」を用いることは、学生の実習体験を意味づける上で有効な教育方法ではないかと考える。

看護学実習は、学生にとって看護を実感する重要な機会となることから、学生の体験を経験知に引きあげるようにすることが必要となること、また、教員も臨地実習指導者も体験を意味づけられるよう指導力を磨く必要性が確認された。

文献

河野秀一 (2015). ステップアップ! 看護マネジメントリフレクション+概念化スキル プロセスレコードでもっと実践. 大阪: メディカ出版.

Kolb, D. A., Peterson, K. (2018). 最強の経験

学習 (中野眞由美訳). 東京: 辰巳出版.

厚生労働省 (2003). 新たな看護のあり方に関する検討会報告書.

厚生労働省 (2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.

厚生労働省 (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.

松尾睦 (2011). 職場が生きる人が育つ「経験学習」入門. 東京: ダイヤモンド社.

森千鶴, 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子 (1992). 「アセスメント」の効果的な指導方法 看護学生を対象として. 教務と臨床指導者, 5 (2), 143-156.

二十軒温美 (2017). 看護学先行研究からみた臨地実習指導者の現状と課題. 園田学園女子大学論文集, 51, 53-60.

奥津文子, 片山由美, 大矢千鶴, 赤澤千春, 荒川千登世 (2002). 効果的な臨地実習指導方法の検討—学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察. 京都大学医療技術短期大学部紀要, 22, 33-41.

佐藤みつ子 (1996). 看護学実習指導シリーズ 1 わかりやすい指導案作成. 東京: 教育メディア.

佐藤みつ子 (1998). 看護学実習指導シリーズ 3 成人看護学実習指導案の作成と展開. 東京: 教育メディア.

高木薫 (2001). 臨地実習における指導者のもつ問題—文献に見る臨地実習指導上の悩みや困難—. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 26, 174-181.

安酸史子, 北川明 (2018). 看護を教える人のための経験型実習教育ワークブック. 東京: 医学書院.

Abstract

The Academy of Nursing Education Research aims to improve nursing education and the quality of nursing care. As part of the Academy's activities, seminars have been held since 2000. The purpose of the 2019 seminar was to explore an ideal practicum instruction that incorporates students' experiences, through the analysis of practicum instruction scenarios by using an "experiential learning model," thereby discussing the essence of practicum instruction. The seminar provided lectures on the background of nursing practicums, the expected roles of instructors in clinical practicums, the characteristics of nursing students, representative learning models, learning from experiences, the experiential learning model, and implementation of the experiential learning model in instruction. This was followed by group work on assigned cases. Feedback about the seminar included, "I found the seminar very useful in clarifying what to teach through students' concrete experiences," and "I'd like to become more aware of conceptualization during my instruction without being fixed on the issues at hand." Such feedback confirmed the need to improve instruction skills, as nursing practicums are important opportunities for students.